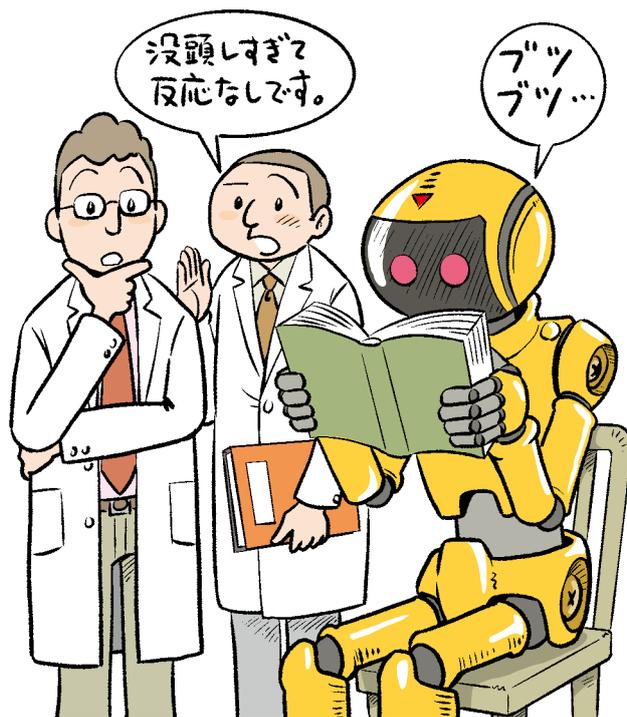


## 「わかる」という体験

影浦 峽

東京大学大学院 教育学研究科 教授



レストランや料理の紹介を読んで美味しく思うことと実際に食べて美味しさを体験することが質的に違うこと、そして味が「わかる」ことが後者を指すことは、恐らく誰もが認めるところでしょう。料理ほど明確ではありませんが、映画評を読んだだけでその映画がわかったとは言えないことにも、たぶん多くの人が同意するのではないのでしょうか。

ところが、いわゆる「知識」とそれを伝える本について、私たちは、解説を読めば元の本が「わかる」と考える傾向があるようです。もしかすると、料理を食べることと料理の解説を読むことに相当する違いがあるにもかかわらず、「わかる」体験をもたらす媒体が解説を伝える媒体と同じ「言葉」であるため、両者が混同されているのかもしれない。

このように考えると、少しはっきりすることがあります。まず、「わかる」瞬間、すなわち「腑に落ちる」ことはあくまで体験であって、情報の受容や操作とは違うこと。また、人が何かを「わかる」とときには没頭するプロセスを経ることが多いこと——つまり人はいわば「過学習」を通して普遍的知識を身につけるように見えることなどです。

そうだとすると、一般に過学習を避けて一般化をめざす機械学習的な方法で知識を伝える言葉を扱うことにより、コンピュータが人間のように「わかる」状態を実現するのは難しそうです。それでもなお、「腑に落ちる」ことは人間のみに許された特権で、所詮コンピュータにはできないことだと開き直すのではなく、コンピュータが「わかる」ことを目指すのならば、「腑に落ちる」ぎりぎりのところまで突き詰める。例えば読書に「没頭する」プロセスをコンピュータでどう扱うかが——手段とは別に——概念的にとっても大切な課題になりそうです。

ここで「わかる」ことはあくまで知的な体験ですから、「没頭する」ことも、感性的にはなく知識に関わる明晰で論理的なプロセスとして捉えることが最初の入り口になります。「わかる」ことを、情報の操作と処理に還元するのではなく「腑に落ちる」ことへ向けてどこまで明晰に辿れるか、この点が、実際に東大に入れるかどうかとは別に——というのも一説によると情報の処理がうまければ東大には入れるそうですから——NIIの進める「ロボットは東大に入れるか」の挑戦で何よりもわくわくする点ではないのでしょうか。

情報から知を紡ぎだす。



表紙イラスト

東大のシンボル・赤門で警備員に制止されるロボット。「ロボットは東大に入れるか。」プロジェクトでも、実際にロボットが赤門をくぐって、入試を受けるというわけではない。研究が進められているのは、あくまでも人工頭脳の開発である。

国立情報学研究所ニュース [NII Today] 第60号 平成25年6月

発行：大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所 <http://www.nii.ac.jp/>

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2丁目1番2号 学術総合センター

編集長：東倉洋一 表紙画：小森誠 写真撮影：川本聖哉 / 佐藤祐介 デスク：田井中麻都佳 制作：インスケイブ株式会社

本誌についてのお問い合わせ：総務部企画課 広報チーム TEL：03-4212-2164 FAX：03-4212-2150 e-mail：kouhou@nii.ac.jp